

ご来場いただいたみなさまへ

本日は小林昴写真展にお越しいただき、ありがとうございます。

平成29年3月14日昴の交通事故死から、1年の歳月が流れました。昴の生前及び葬儀の際は、大変お世話になりました。

私たち両親は、この1年間、昴が突然いなくなってしまった悲しみと闘い、昴の死の意味、そして私たちが生きる意味を問い続けています。

私は、昴が亡くなってからずっと、我が家に大量に保存してあった写真データを見直し、生前の昴を思い出してきました。そして、昴が生まれた平成15年12月25日以降の昴の写真を次々に印刷し、「昴との思い出のアルバム」を作成しました。約9ヶ月間かけて作成したアルバムは、35冊になりました。

また、アルバムの作成途中で重複して印刷してしまった写真がたくさんあり、今回、そのうちの1枚をパネルに切り貼りしました。それが、ここに展示してあるパネルです。

あれから1年が経過しましたがけれども、昴を亡くした悲しみ、寂しさは薄らぐことはありませんでした。

素直に言います。

悲しい。
昴が死んでしまって、私は悲しい。悲しいものは悲しい。絶対に悲しい。

悲しみの涙って、枯れることがないんですね。
私たちの胸にぽっかりと空いた穴は、歳月を重ねるごとに大きくなっているかもしれません。

親として、我が子の成長が見られなくなり、当然にあったはずの我が子と共にする苦楽がなくなってしまうって、本当に寂しいです。
それは、絶対に埋められない。

私は、昴が亡くなるまでの13年間、精一杯働き、自分と家族が幸せになるために尽くしてきました。だから、これまでの人生に何の悔いもありません。むしろ、胸を張りたいです。

私は親として、昴にいろんな期待を寄せていました。もちろん、昴以外の4人の我が子にもいろんな期待を寄せています。妻は妻で、我が子に対する期待があると思います。

現在4人の兄は、それぞれの人生を歩んでいます。兄は自分が成し遂げられなかった夢を、5人兄弟の末っ子である昴に託していたことでしょう。
昴自身も、私と妻とそして4人の兄からの期待を背負い、13年間精一杯生きてくれました。

生後間もないころから、笠間クラブの先輩にかわいがられ、小学1年生からは、4人の兄と同じように、笠間クラブと菰野ボーイズで野球一筋に生きてきた昴です。

昴が亡くなる前の冬、私は昴と、一生野球で生きて行こうと誓い合いました。あれは、二人で菰野ヘナイター練習に向かう車の中でした。あゝ、昴が生きていたら、その先には、どんな野球人生があったのかなあ。夢の続きを見たかったなあ。

昴のバッティング、すごかったんですよ。父親の私が見ていても、惚れ惚れするような当たりでした。肩も強かったしね。その分、ご飯の量もすごかったです。

体はごっつかったですが、私たち親や兄にも気配りのできる、心優しい昴でした。

小学生のころから、学校の中で弱い子をかばい、助ける行動ができる心優しい昴だったと、昴が亡くなった後、同級生のお母さんが教えてくれました。

大安中学校では、1年2組の室長もがんばって務めていたそうですね。クラスでの昴の姿も見えてみたかったなあ。

昴の死の意味。
私たちが生きる意味。

未だその答えは、完全に見つけられてはいません。
しかし、この1年間で一つだけわかったことがあります。

それは、私たち両親が、昴の分まで生き抜かなければならない、昴の分まで生き抜きたいんだ、ということです。

昴の分まで生きるって、どういうことか。

それは、昴が死んでしまった悲しみを抱えながら、私と妻、私たち二人の生きざまを見てもらい、私たちの周りの方々に元気を与え続けていくこと。
自分が幸せになるだけでなく、周りのみなさんも幸せにしていける私たちになること。
私は今、そう考えています。

残念ながら、昴は亡くなりましたが、私たち遺族は、昴の生前の姿を永遠に胸に刻み、その分強く、生き抜いていきたい。

みんな、それでええよね。
昴、俺たちそう生きていくぞ。見とってな。ずっとやぞ。ずっと。

先週の一周忌法要で、そう親族に話しました。

ご来場いただいたみなさまには、生前、大変お世話になりました。

みなさまにおかれましても、生前の昴の姿を、少しでも心に刻んでいただき、そして、もしもつらくなったときには、昴の笑顔を思い出していただき、今後の人生を力強く生きていただければと思っています。

昴はいつも、優しく微笑んで、私たちを見守ってくれています。

ご来場いただいたみなさまのご多幸を、心よりお祈り申し上げております。
ご多忙の中、本日はご来場いただき、ありがとうございました。

平成30年3月17日
小林 昌宏